

『中論』 諸注釈書における *Akutobhayā* の引用について

安 井 光 洋

はじめに

Akutobhayā (ABh) と青目釈『中論』(『青目註』) はどちらも Nāgārjuna の主著 *Mūlamadhyamakakārikā* (MMK) の注釈書であり、数ある MMK 注釈書の中でも最古層のものとされている。ABh はチベット語訳のみが現存しており、『青目註』は鳩摩羅什による漢訳のみが存在する。この両注釈書はその内容が類似していることで知られ、これについて「もともとは同一のテキストであった」という見解を示す先行研究も存在する⁽¹⁾。

他方、両者の相違点については羅什の弟子僧叡による『青目註』の序文に、羅什が『青目註』を漢訳する際、その内容に加筆・修正を施したと記されている⁽²⁾。そのため、漢訳以前の『青目註』は ABh により近似していたという可能性が考えられる。

また ABh と共通した記述が見られるのは『青目註』だけではなく、*Buddhapālita* (BP)、*Prajñāpradīpa* (PP)、*Prasannapadā* (PSP) といった後代の注釈書においても ABh の記述が広く引用されている。しかし、その際にはいずれの注釈書も ABh という書名はおろか、それが他本からの引用であることさえ明記せず、あたかも自説であるかのように ABh を用いている。

さらに、そのような ABh の引用パターンを類型化すると BP、PP、PSP に共通して ABh と同様の記述が認められ、漢訳である『青目註』

にのみ相違が見られるという例が少なからず見受けられる。それはつまり、インド中観派において ABh の解釈が伝統的解釈として受け継がれており、他方、漢語圏においてのみそれとは異なった解釈が成立していたという可能性を示唆している。

よって、本稿においてはそのような例に該当する箇所を挙げ、インド中観派における ABh の位置づけと、『青目註』の独自性について考察を試みたい。

1. 第7章第4偈

ABh の記述が BP 以降の注釈書に共通して用いられている例として、まず第7章第4偈⁽³⁾の注釈を挙げる⁽⁴⁾。この偈頌は Nāgārjuna からの批判に対して、アビダルマの立場から反論が述べられている偈頌である。そして、その内容はアビダルマで説かれる九法俱起⁽⁵⁾の教理に基づいていると考えられる。

しかし、この偈頌に対して ABh の注釈では9ではなく下記の15の法が同時に生ずるとして、それが列举されている。そして、この ABh の記述が他の MMK 注釈書においても一様に確認されるのである。以下がその一覧である。

〔ABh〕 D.43b7, P.52a4

- ① 法 (chos) ② 生 (skye ba) ③ 住 (gnas pa) ④ 滅 ('jig pa)
⑤ 具有 (ldan pa) ⑥ 老 (rga ba) ⑦ 解脱 (rnam par grol ba) あるいは邪解脱 (log pa'i rnam par grol ba) ⑧ 出離 (nges par 'byung ba nyid) あるいは不出離 (nges par 'byung ba ma yin pa nyid) ⑨ 生生 (skye ba'i skye ba) ⑩ 住住 (gnas pa'i gnas pa)
⑪ 滅滅 ('jig pa'i 'jig pa) ⑫ 具有具有 (ldan pa'i ldan pa) ⑬ 老老 (rga ba'i rga ba) ⑭ 解脱解脱 (rnam par grol ba'i rnam par grol ba) あるいは邪解脱邪解脱 (log pa'i rnam par grol ba'i log pa'i rnam par grol ba) ⑮ 出離出離 (nges par 'byung ba nyid kyi

nges par 'byung ba nyid) あるいは不出離不出離 (nges par 'byung ba ma yin pa nyid kyi nges par 'byung ba ma yin pa nyid)

〔BP〕⁽⁶⁾ Ye [2011b] p.110, D.188b4, P.212b1

①法 (chos / dharma) ②生 (skye ba / utpāda) ③住 (gnas pa / sthiti) ④滅 ('jig pa / bhaṅga) ⑤具有 (ldan pa / samanvāgama) ⑥老 (rga ba / jarā) ⑦正解脱 (yang dag pa'i rnam par grol ba / samyagvimukti) あるいは邪解脱 (log pa'i rnam par grol ba / mithyāvimukti) ⑧出離 (nges par 'byung ba nyid / nairyāṇikatā) あるいは不出離 (nges par 'byung ba ma yin pa nyid / anairyāṇikatā) ⑨生生 (skye ba'i skye ba / utpādasyotpādaḥ) ⑩住住 (gnas pa'i gnas pa / sthiteḥ sthitiḥ) ⑪滅滅 ('jig pa'i 'jig pa / bhaṅgasya bhaṅgaḥ) ⑫具有具有 (ldan pa'i ldan pa / samanvāgamasya samanvāgamah) ⑬老老 (rga ba'i rga ba / jarāyāḥ jarā) ⑭正解脱正解脱 (yang dag pa'i rnam par grol ba'i yang dag pa'i rnam par grol ba / vimukter vimuktiḥ) あるいは邪解脱邪解脱 (nges par 'byung ba nyid kyi nges par 'byung ba nyid / mithyāvimukter mithyāvimuktiḥ) ⑮出離出離 (nges par 'byung ba nyid kyi nges par 'byung ba nyid / nairyāṇikatāyāḥ nairyāṇikatā) あるいは不出離不出離 (nges par 'byung ba ma yin pa nyid kyi nges par 'byung ba ma yin pa nyid / anairyāṇikatāyāḥ anairyāṇikatā)

〔PP〕 D.103a2, P.125b7 ※犢子部 (gnas ma'i bu'i sde pa) の説として挙げる

①法 (chos) ②生 (skye ba) ③住 (gnas pa) ④滅 ('jig pa) ⑤具有 (ldan pa) ⑥住異 (gnas pa las gzhan du gyur pa nyid) ⑦正解脱 (yang dag pa'i rnam par grol ba) あるいは邪解脱 (log pa'i rnam par grol ba) ⑧出離 (nges par 'byung ba nyid) あるいは

は不出離 (nges par 'byung ba ma yin pa nyid) ⑨生生 (skye ba'i skye ba) ⑩住住 (gnas pa'i gnas pa) ⑪滅滅 ('jig pa'i 'jig pa) ⑫具有具有 (ldan pa'i ldan pa) ⑬住異住異 (gnas pa las gzhan du 'gyur ba nyid kyi gnas pa las gzhan du 'gyur ba nyid) ⑭正解脱 正解脱 (yang dag pa'i rnam par grol ba'i yang dag pa'i rnam par grol ba) あるいは邪解脱 邪解脱 (log pa'i rnam par grol ba'i log pa'i rnam par grol ba) ⑮出離出離 (nges par 'byung ba nyid kyi nges par 'byung ba nyid) あるいは不出離不出離 (nges par 'byung ba ma yin pa nyid kyi nges par 'byung ba ma yin pa nyid)

[PSP] LVP [1903-1913] p.148.1 ※正量部 (sāmmitiya) の説として挙げる

①法 (dharma) ②生 (utpāda) ③住 (sthiti) ④無常 (anityatā) ⑤具有 (samanvāgama) ⑥老 (jarā) ⑦正解脱 (samyagvimukti) あるいは邪解脱 (mithyāvimukti) ⑧出離 (nairyāṇikatā) あるいは不出離 (anairyāṇikatā) ⑨生生 (utpādotpāda) より⑮不出離 不出離 (anairyāṇikatānairyāṇikatā) に至るまで

『青目註』 T.30 p.9b15

①法 ②生 ③住 ④滅 ⑤生生 ⑥住住 ⑦滅滅

以上を見てみると『青目註』以外の注釈書は明らかに ABh と共通した15種の語彙を列挙しているが、その一方で必ずしもすべての語彙が完全に一致しているのではないことがわかる。それらの相違を1つずつ確認していくと、まず ABh では⑦と⑭がそれぞれ解脱 (rnam par grol ba)、解脱解脱 (rnam par grol ba'i rnam par grol ba) とされていたのに対して、BP では正解脱 (yang dag pa'i rnam par grol ba)、正解脱正解脱 (yang dag pa'i rnam par grol ba'i yang dag pa'i rnam par grol ba) とされている⁽⁷⁾。これは次に挙げられている邪解脱 (mithyāvimukti)

との対比から付加されたものと考えられ、さらにBP以降のPP、PSPでもその形が踏襲されている。また、それ以外の箇所についてはチベット語訳がABhと一致しているため、ABhのサンスクリットもこのBPのテキストと同様の14種を挙げていたものと推測できる。

続いて、ABh、BPで老 (rga ba / jarā) とされていた箇所がPPでは住異 (gnas pa las gzhan du gyur pa nyid) とされているが、これも住の状態から滅の状態へ衰減させるという意味であるから老とほぼ同様の意味と考えてよいだろう。また、PPはこの15法という説を「犢子部の説である」としてABh、BPでは言及されなかった特定の部派名を挙げて説明している。しかしながら、PSPではこれが「正量部の説」とされており、部派の特定については注釈者間で見解が一致していない⁽⁸⁾。またPSPは後半の⑨から⑮の間は「生生より不出離不出離にいたるまで」という形で省略されている。

他方、羅什の漢訳による『青目註』は15法ではなく7法を挙げている。これは生住異滅の四相からMMKに説かれている形式に合わせて「異」を抜いたうえで九法俱起に当てはめたものと考えられる。また、これと同様の7種が同じく羅什訳である『十二門論』においても挙げられている⁽⁹⁾。

以上のように『青目註』以外の注釈書はいずれもABhと共通した15法を列挙するが、各注釈書ごとに若干の修正が加えられており、必ずしも一致していない。この修正について『青目註』以外の三者は、この第7章第4偈を注釈するにあたり、ABhに示される解釈を参照はしたが、この15法に関する個々の知識に基づいて修正を加えたものと考えられる。つまりBuddhapālita、Bhāviveka、Candrakīrtiがそれぞれの時代に知り得た最新の情報へと更新されているということである。そのためPPの犢子部とPSPの正量部という部派の想定についても、当時彼らの周囲にいた部派がそれぞれ上記のような教理を説いていたことに起因すると考えられる。

他方、『青目註』にのみ相違が生じている点については、『青目註』の

伝播過程もしくは羅什による漢訳の際に、現行の内容に書き換えられたと考えるべきだろう。そしてその理由としては、当該地域およびその周辺では、後代に犢子部ないし正量部に同定される上記の教理が伝わっていなかったため、当地においてより一般的であった九法俱起の教理に改められたという可能性が考えられる。

また、このように ABh に列挙されている語彙が BP 以降の注釈書に踏襲され、『青目註』のみが異なる形を示しているという例は第19章第5偈の注釈にも見受けられる⁽¹⁰⁾。

2. 第18章第6偈

次に MMK 第18章から例を挙げる。この章では「我 (ātman)」がテーマとして論じられるが、以下に挙げる第6偈の解釈をめぐって BP、PP、PSP に ABh からの影響が見られる。まずは当該の偈頌と ABh の注釈を見てみよう。

[MMK Chap.18 v.6] Ye [2011a] p.302
ātmety api prajñāpitam anātmety api deśitam/
buddhair nātmā na cānātmā kaścīd ity api deśitam / /
「我である」とも仮説され、「無我である」とも説かれる。
「いかなる我もなく、無我もない」と諸仏によって説かれる。

[ABh Chap.18 v.6] D.70a6, P.82a3
bdag go zhes kyang btags gyur cing / /
bdag med ces kyang bstan par 'gyur / /
sangs rgyas rnams kyi bdag dang ni / /
bdag med (med D ; med pa P) 'ga' yang med par bstan / /
[6]

sangs rgyas bcom ldan 'das sems can rnams kyi bsam pa dang
bag la nyal mkhyen pa la mkhas pa rnams kyi / gdul ba de dang

de dag la yang dag par gzigs nas/ gdul ba gang dag la ①'jig rten
 'di med do/ / 'jig rten pha rol med do/ / sems can rdzus (rdzus
 D ; brdzus P) te skye ba med do snyam pa'i lta ba de lta bu
 byung bar gyur pa de dag gi bdag med par lta ba bzlog pa'i phyir
 bdag go zhes kyang btags (btags D ; gtags P) par gyur to/ / ②
 gdul ba gang dag la las dge ba dang mi dge ba rnams kyi byed pa
 po dang de dag gi 'bras bu za ba po dang (dang D ; dag P)
 bcings pa dang thar pa dag ston par byed pa'i bdag ces bya ba de
 ni 'ga' zhiig yod do snyam pa'i lta ba de lta bu byung bar gyur pa
 de dag gi bdag tu lta ba bzlog pa'i phyir (phyir P ; phyir ro D)
 bdag med ces kyang bstan par gyur to/ / ③gdul ba bzang po
 gang dag dge ba'i rtsa ba'i tshogs yongs su smin pa/ srid pa'i chu
 bo las brgal bar nus pa don dam pa'i gtam gyi snod du gyur pa de
 dag la ni bdag dang bdag med pa (pa P ; n.e. D) 'ga' yang med
 par bstan to/ /

④yang na gzhan du brtag ste mu stegs byed kha cig 'du byed
 bdag med pa (med pa P ; med pa byed pa D) skad cig ma re re
 la rnam par 'jig pa'i dang can nam dus gzhan du nges par gnas pa
 rnams la bdag med na/ las dang 'bras bu med par brtags nas 'jigs
 ('jigs D ; 'jig P) par gyur pa dag gis ni bdag go zhes kyang btags
 par gyur to (gyur to D ; 'gyur ro P) / / ⑤gzhan gang dag 'di ni
 lus dang dbang po dang blo'i tshogs tsam du zad de/ 'di la rgyu
 dang 'bras bu las gang rtogs par 'gyur ba'i bdag ni ngo bo nyid
 kyis (kyis D ; kyi P) med do (do D ; de P) / / sems can du (du
 D ; n.e. P) bgrang ba'i 'du byed bdag med pa nges par mi gnas pa
 gnas su ma byas pa 'di dag la yang 'khor ba mi 'thad do zhes bya
 bar rig nas (rig nas D ; rigs nas P) / rgyu dang 'bras bu'i 'brel pa
 la rmongs pa dag gis ni bdag med ces kyang bstan par gyur to/ /
 sangs rgyas bcom ldan 'das chos thams cad la mkhyen pa lkog tu

ma gyur pa (gyur pa P ; gyur pa 'jug pa D) rnam kyis ni/ bdag
dang bdag med pa 'ga' yang med par bstan to/ /

「我である」とも仮説され、「無我である」とも説かれる。

諸仏によっていかなる我も無我も存在しないと説かれる。[6]

仏世尊は諸衆生の意樂と随眠を知って、諸善巧によってそれぞれの所化たちを正しく観察して、①「この世間は無い。あの世間は無い。有情が化生することは無い」と考える、そのような見解を生じる所化たちの無我という見解を否定するため「我である」とも仮説したのである。②「もろもろの善、不善業を為す者であり、それらの結果を享受する者であり、束縛と解脱が示された、我というなにかがある」と考える、そのような見解を生じる所化たちの我見を否定するため「無我である」とも示したのである。③善根の資糧がよく成熟しており、有の川を渡ることができる、勝義を語る[に値する]器となった善い所化たちには「いかなる我も無我も無い」と示すのである。

④また別の解釈では、「つくられたものには我が無く、それぞれの刹那に滅する性質であったり、次の時まで確実に住するものなどに我が無いなら行為と結果が無くなる」と考え、恐れたある他学派の者たちは「我である」とも仮説したのである。⑤あるいは「これは肉体と感覚器官と知性の集まりに過ぎず、ここに原因と結果から想定されることになる我は本性としてあるのではない。衆生と考えられているつくられたものには我が無く、確実に住すること無く、依り所が無いそれらが輪廻することは理に合わない。」ということを知って、因果の結びつきに無知である者たちによって「無我である」とも示されたのである。[これに対して]一切法についての知が隠されていない仏世尊たちは「いかなる我も無我も無い」と示すのである。

まず、この第6偈では我について有我、無我、非有我非無我の3種の

説が論じられている。そして、ABhはこの偈頌を2通りに解釈可能なものであるとしている。つまり、注釈前半部分のように有我、無我、非有我非無我のいずれも諸仏によって説かれたとする解釈と、「また別の解釈では (yang na gzhan du brtag ste)」以下に示される解釈である。この後者の解釈によれば諸仏による説示 (buddhair deṣitam) はあくまで偈頌後半の非有我非無我のみであり、残りの有我、無我は他学派の説であるという。

以上のようにABhでは有我、無我、非有我非無我それぞれに2通りの解釈が示されているため、合計で6種の説が挙げられていることになる。そして、それらの6種のうち上記に下線を付した5つがBP以降の各注釈書で適宜使用されており、さらにその用法をめぐって種々の興味深い異同が生じている。よって以下ではそれらの例について順に確認していくことにする。またその際には論述の便宜上、まず有我、無我、非有我非無我すべてを諸仏の教説と見る解釈をA、そして有我、無我を他学派、非有我非無我を諸仏の教説とする解釈をBとして各注釈書の該当箇所を列挙していく。

有我A

〔BP〕 D.242a2, P.273b4

'jig rten 'di med do/ / 'jig rten pha rol med do/ / sems can rdzus te skye ba med do

この世間は無い。あの世間は無い。有情が化生することは無い。

〔PP〕 D.185b6, P.231b4

'jig rten 'di med do/ / 'jig rten pha rol med do/ / legs pa byas pa dang/ nyams pa byas pa'i las rnams kyi 'bras bu dang/ rnam par smin pa med do/ sems can rdzus te skye ba med do/

この世間は無い。あの世間は無い。善行や悪行の行為の結果が異熟することも無い。有情が化生することは無い。

[PSP] LVP [1903-1913] p.356.6

nāsty ayam loko nāsti paraloko nāsti sukṛtaduṣkṛtānām karma-
nām phalavipāko nāsti sattva upapāduka

この世間は無い。あの世間は無い。善行、悪行の行為の結果が異熟
することも無い。有情が化生することは無い。

無我A

[BP] D.242a4, P.273b6

gdul bya gang dag la las dge ba dang mi dge ba rnam kyī byed
pa po dang de dag gi 'bras bu 'dod pa dang mi 'dod pa dag za ba
gang yin pa dang/ gang gis bcings pa dang thar pa dag ston par
byed pa'i bdag ces bya ba de ni 'ga' zhig yod do/ / gzhan du na
bdag med na de dag thams cad don med pa nyid du 'gyur ro
snyam pa'i lta ba de lta bu byung bar gyur pa/ 'khor ba'i rgya
mtsho chen por lhung ba/ ngar 'dzin pa dang nga yir 'dzin pa'i
chu srin 'dzin khri zin pa/ lta ba'i chu bos sems g-yengs pa/ srid
pa'i bde ba la chags pa de dag gi bdag tu lta ba bzlog pa'i phyir
bdag med do/ / zhes kyang bstan to/ /

「もろもろの善、不善業を為す者であり、それらの望ましい結果と
望ましくない結果を享受する者であり、束縛と解脱が示された我と
いうなにかがある。あるいは、我が無ければ、それらすべては無意
味であることになる。」と考える、そのような見解を生じ、輪廻の
大海に落ち、我執と我所執の龍に捕えられ、[邪] 見の川によって
心を乱され、有の楽に貪著する所化たちの我見を否定するため「無
我である」とも示したのである。

非有我非無我A

[BP] D.242a6, P.274a1

gdul ba bzang po gang dag dge ba'i tshogs yongs su smin pa/ srid
pa'i chu bo las brgal bar nus pa/ don dam pa'i gdam gyi snod du
gyur pa de dag la/ sangs rgyas bcom ldan 'das don dam pa'i de
kho na ston pa rnam par 'dren pa chen po rnams kyis sgyu ma 'di
ni byis pa 'drid pa ste/ 'di la bdag dang bdag med pa 'ga' yang
med do/ / zhes ston te/

善の資糧がよく成熟しており、有の川を渡ることができ、勝義を語る〔に値する〕器となった善い所化たちには、勝義の真実を教示する大導師である諸仏世尊によって「この幻影は幼童を誑かすものである。ここにおいてはいかなる我も無我も無い」と説かれた。

有我B

〔PP〕 D.186b1, P.232b2

yang gzhan du brtag ste/ mu stegs byed kha cig 'du byed bdag
med pa/ skad cig ma re re la rnam par 'jig pa'i dang (dang P ;
dang tshul D) can nam dus gzhan du nges par gnas pa rnams la
bdag med na/ las dang 'bras bu med par brtags nas/ 'jig par 'gyur
ba dag gis bdag yod do zhes kyang brtags (brtags D ; btags P)
pas de'i pyir/ bdag go zhes kyang brtags gyur cing zhes bya ba
gsungs so/

また別の解釈では、「つくられたものには我が無く、それぞれの刹那に滅する性質であったり、次の時まで確実に住するものなどに我が無いなら行為と結果が無くなる」と考え、恐れたある他学派の者たちは「我がある」とも考えたために「我である」とも仮説したということが述べられた。

〔PSP〕 LVP [1903-1913] p.360.3

atha vā ayam anyo 'rthaḥ ātmety api prajñapitaṃ sāmṅhyādibhiḥ
pratikṣaṇavinaśvarāṇaṃ saṃskārāṇaṃ karmaphalasaṃbandhābhā-

vam utprekṣya/

あるいはまた、別の意味としては、サーンキヤ派等は刹那ごとに滅するつくられたものには行為と結果の結びつきは無いと誤信して「我である」とも仮説した。

無我B

[PP] D.186b2, P.232b4

'di ni lus dang/ dbang po dang/ blo'i tshogs tsam du zad de/ 'di la rgyu dang 'bras bu las gang ma gtogs par 'gyur ba'i bdag ni ngo bo nyid kyis med (med P ; zad D) de/ sems can du bgrang ba'i 'du byed bdag med pa/ nges par mi gnas pa gnas su ma byas pa 'di dag la yang 'khor ba mi 'thad ('thad D ; 'bad P) do zhes bya bar rig (rig P ; rigs D) nas/ rgyu dang 'brel pa la rmongs pa/

「これは肉体と感覚器官と知性の集まりに過ぎず、ここに原因と結果とは別に我は本性としてあるのではない。衆生と考えられているつくられたものには我が無く、決定して住すること無く、依り所が無いそれらが輪廻することは理に合わない。」ということを知って、原因との結びつきに無知である。

[PSP] LVP [1903-1913] p.360.4

anātmety api prajñāpitaṃ lokāyatikaiḥ upapatty ātmānaṃ saṃsartāraṃ apaśyadbhiḥ/ etāvān eva puruṣo yāvān indriyagocaraḥ/ ... ityādinā/ taimirikopalabdhakeśamaśakādiṣv iva vitaimirikair iva bālajanaparikalpitātmanātmādi vastusvarūpaṃ sarvathaivāp-
aśyadbhiḥ buddhair nātmā na cānātmā kaścid ityapi deśitam/ /

唯物論者たちは輪廻する者として現れている我を認めず「人間とは感覚器官の領域にある限りのものに過ぎない。(中略) 云々」といって「無我である」とも仮説した。眼病患者が知覚する毛髪や蚊などを、眼病の無い者たちは(知覚しない)ように、愚者の考え出し

た我や無我などの事物の本性を認めない諸仏は「いかなる我も無く、無我も無いと」説いた。

以上を参照すると、まず有我Aについて上記ABhの下線部①「この世間は無い。あの世間は無い。有情が化生することは無い。」という、虚無論者のものと思われる教説がBP、PP、PSPの三者にも共通して挙げられている⁽¹¹⁾。また、PPとPSPには「善行、悪行の行為の結果が異熟することも無い」というABh、BPには見られない一節が付加されている。続く無我Aと非有我非無我AについてはABhからの引用が認められるのはBPのみである。そのため、ABhの注釈の前半部分に関してはBPの注釈がもっとも類似している。しかし、そのBPについてもABhの下線部②、③と完全に一致するわけではなく、表現に若干の付加が見られる。

次に他学派の有我説、無我説を挙げる後半部分であるが、まず前半部分でABhともっとも類似していたBPがここでは一転してABhと共通した記述が見られない。しかし、前半部分とは異なる解釈として有我B、無我Bを他学派の教説とする点ではABhと共通している⁽¹²⁾。

一方、PPとPSPであるが、まずPPの有我BがABhの下線部④とほぼ一致している。さらにPSPではABh、PPと同様の説を挙げつつ、それがサーンキヤ派等の教説であるとしている。このようにABhで挙げられている他学派の教説と同様、もしくは類似した説がPP、PSPでも挙げられ、さらにそれを説く学派が特定されるという例は先に論じた第7章第4偈の語彙をPPが犢子部、PSPが正量部として挙げる例と類似している。

そして、PPの無我BがABhの下線部⑤と一致している。また、PSPではABhと一致した記述は見られないが、上記の引用の末尾から、やはり有我説と無我説を他学派のものと捉え、非有我非無我のみを諸仏の教説とする解釈をここで適用していることが分かる。

以上、ABhの注釈の中から5カ所が後代の注釈書において使用され

ている例を確認したが、それは必ずしもすべての例が一様に用いられているというものではなく、各注釈者によって取捨選択されているものであることが分かった。

それでは最後に『青目註』の該当箇所を見てみよう。

『青目註』 T.30 p.24a1, c10

諸佛或説我 或説於無我 諸法實相中 無我無非我〔6〕⁽¹³⁾
諸佛以一切智觀衆生故。種種爲説。亦説有我亦説無我。若心未熟者。未有涅槃分。不知畏罪。爲是等故説有我。又有得道者。知諸法空但假名有我。爲是等故説我無咎。又有布施持戒等福德。厭離生死苦惱畏涅槃永滅。是故佛爲是等説無我。諸法但因縁和合。生時空生。滅時空滅。是故説無我。但假名説有我。又得道者。知無我不墮斷滅故説無我無咎。是故偈中説。諸佛説有我亦説於無我。若於眞實中不説我非我。

以上のように、『青目註』ではABhに示されたような有我、無我、非有我非無我を2通りに解釈するという手法は用いられておらず、いずれも諸仏の教説であるとされている。ここに示される他本との解釈の相違については、偈頌の漢訳方法が大きく関係している。つまり、先に見たMMKの偈頌では「諸仏によって説かれた (*buddhair deśitam*)」という一節が後半の c、d 句に置かれており、それがチベット語訳にも反映されていた。ABhをはじめとする注釈書において有我、無我、非有我非無我すべてを諸仏の教説とする解釈と、非有我非無我のみを諸仏の教説とする解釈の2つの解釈が成り立つのはそのためである。

他方、この『青目註』の偈頌では主語である「諸仏」が冒頭に配置されているため、3種の説すべてを諸仏の教説とする解釈しかできない。また、この偈頌には原文に見られなかった「諸法実相」という語が加えられている。以上のことから、この偈頌は明らかに羅什によって意識されていると分かる。よって、それに伴う注釈部分についても羅什の意図

が反映されている可能性が考えられる。

そして、羅什がそのような措置を施した根拠としては、後秦において人口に膾炙していなかった虚無論者やサーンキヤ派といった学派の教説をそのまま漢訳して挙げるよりも、MMKの思想を主体的に論じる方が注釈書としての性格上、妥当であると判断されたことによるものと思われる⁽¹⁴⁾。

結語

ここまでABhの記述がBP、PP、PSPにおいて使用されている例を確認してきた。上記の例を改めて検討すると、第7章第4偈と第18章第6偈のいずれの例も中観派の教理が述べられている箇所ではなく、反論者である他学派の教理について述べられた箇所が引用されていることが分かる。それはつまり、いずれの注釈者たちもMMKの教理については自分自身の解釈を主体的に述べているが、それに対する反論者たちの教理についてはABhに示される解釈に基づいているということを意味する。このことからABhは中観派において他学派の教理を参照する際の典拠として用いられていたと考えられる。

またそれだけでなく、第18章第6偈を2通りに解釈するという手法が後代の注釈書においても踏襲されていることから、ABhに示される解釈がMMK注釈の際の伝統的解釈として中観派において伝承されていたことが分かる。

しかし、後代の注釈者たちがABhを引用する際にはその記述をそのまま用いるのではなく、正解脱 (*samyagvimukti*) という語彙の修正や、犢子部、正量部、サーンキヤといった学派の同定のように、注釈書としての論証性をより高めるため、適宜内容を補完しながら中観派におけるMMK注釈の法流を築いていったという経緯が窺える。

そして、前述のように『青目註』は他の注釈書と一致しない例が多く、その理由としては『青目註』の伝播過程における学派情勢の相違という地理的要因が一つの可能性として考えられた。特に第18章第6偈につい

『中論』諸注釈書における *Akutobhayā* の引用について

ては偈頌に明らかな意識が認められ、注釈部分についてもそれに従った内容となっているため、羅什による解釈が反映されている可能性が高い。

略号および使用テキスト

ABh *Mūlamadhyamakavṛtti-akutobhayā*, D. No.3829, P. No.5229

BP *Buddhapālita-mūlamadhyamakavṛtti*, D. No.3842, P. No.5242

D. sDe dge edition

LVP Louis de la Valée Poussin

MMK *Mūlamadhyamakakārikā* → see Ye [2011]

n.e. not existent

P. Peking edition

PP *Prajñāpradīpa*, D. No.3853, P. No.5353

PSP *Prasannapadā* → see LVP [1903-13]

T. 大正新修大蔵經

『青目註』 青目釈『中論』 T.30 No.1564

『十二門論』：大正蔵 Vol.30 No.1568

参考文献

奥住毅

[2000]：「『ブッダパーリタ中論註釈書』第十八章（「我と法との考察」）和訳」『加藤純章博士還暦記念論集 アビダルマ仏教とインド思想』 pp.251-265

梶山雄一

[1963]：「中論における無我の論理 —第十八章の研究—」『自我と無我 —インド思想 と仏教の根本問題—』 平楽寺書店 pp.479-514

[1967]：「知恵のともしび（中論清弁釈）第十八章 自我と対象の研究」『世界の名著2大乘仏典』 中央公論社 pp.287-328

斎藤明

[2003]：「『無畏論』とその成立年代 『般若経』の引用を手がかりとして」『仏教学』 45 pp.1-28

白館戒雲

[1991]：「ブッダパーリタと『無畏註』の年代」『仏教学セミナー』 54 pp.38-53

丹治昭義

[1981a]：「無我と実在 中論第十八章の注釈史的考察（一）」『南都仏教』 46 pp.1-

37

[1981b]: 「無我と實在 中論第十八章の注釈史的考察 (二)」『南都仏教』47 pp.19-43

[1982]: 「無畏と青目註」『印度學佛教學研究』31-1 pp.83-88

三谷真澄

[2001]: 「『般若灯論』中の『無畏』 ルイゲツェンの翻訳手続きに関する一試論」『日本西蔵学会々報』46 pp.17-30

安井光洋

[2014]: 「『中論』第7章とその解釈の異同について」『智山学報』62 pp.15-34

四津谷孝道

[2000]: 「鳩摩羅什訳『中論』「観法品第十八」覚え書き」『平井俊栄博士古希記念論集 三論教学と仏教思想』 pp.17-45

Huntington, C.W.

[1986]: *The “Akutobhaya” and Early Indian Madhyamaka*, vol. I, II, Ph.D Thesis, The University of Michigan

Lindtner, Christian

[1981]: *Buddhapālita on Emptiness (Buddhapālita mūlamadhyamakavṛtti X VIII)* Indo-Iranian Journal, Vol.23, D. Reidel publishing company, pp.187-217

Poussin, Louis de la Valée

[1903-1913]: *Mūlamadhyamakakārikās (mādhymikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, St. Petersburg Pradhan, P

Ye Shaoyong (叶少勇)

[2011a]: 『中论颂 梵藏汉合校・导读・译注』 中西書局

[2011b]: 『《中論頌》与《仏護釈》基于新發現梵文写本的文献学研究』 中西書局

註

(1) 丹治 [1982]

(2) 「而辞不雅中。其中乖闕煩重者。法師皆裁而裨之。」(T.30 p.1a)

(3) [MMK Chap.7 v.4] utpādotpāda utpādo mūlotpādasya kevalam/ utpādotpādām utpādo mauḷo janayate punaḥ/ / Ye [2011a] p.108 「生生は本生のみを生じる。そして本生は生生を生じる。」

(4) 第7章全体をめぐる各注釈書における解釈の異同については拙論 [2014] で論じた。

(5) 諸行生時九法俱起。一者法。二者生。三者生生。四者住。五者住住。六者異。

『中論』諸注釈書における *Akutobhaya* の引用について

七者異異。八滅。九者滅滅。此中生能生八法。謂法及三相四隨相。生生唯生一法。謂生由此道理無無窮失。(『阿毘達磨大毘婆沙論』 T.27 p.200c25)

- (6) BPのこの箇所についてはYe [2011b] に示されるBPのサンスクリット断片テキストに含まれており、本来のサンスクリットを確認することができる。よって、ここではABhやPSPとの比較のため (Tib. / Skt.) の形式で表記する。
- (7) これについてYe [2011b] に示されるBPのサンスクリットでは、上記の通り⑦が *samyag vimukti* とされているのに対して、⑭が *vimukter vimuktiḥ* とされており *samyag* の語が見られないが、この⑦は写本が欠落しているため、当該箇所は同論文の著者によるチベット語訳に基づいた校訂として示されている。そのため、7世紀ごろのものとされるこの写本の時点ではまだ⑦についても *samyag* の語が見られなかった可能性が高い。そのため、これについてはPPと併せて9世紀初頭のチベット語訳の際に *yang dag pa'i* が付加されたという可能性も考えられる。しかしながら同じく7世紀の人物とされるCandrakirtiのPSPでは⑦に既に *samyag* の語が見られるため、これが後代の書写時の付加ではなくCandrakirti自身によるものであるならば、7世紀の時点で *samyag* を付加する解釈は成立していたことになる。
- (8) これについてPSPの校訂者であるLouis de la Valée Poussinは「この注釈書 (*Madhyamakavṛtti*) では正量部は小乗 (le petit Véhicule) を意味している」(LVP [1903-1913] p.148 fn.1) とするが、May [1959] はPSP第17章で経量部 (*Sautrāntika*) と正量部の教理が明らかに峻別されていることから、LVP [1903-1913] のこの説を誤りであるとする (May [1959] p.111 fn.278)。また、反論者の説をPPが犢子部、PSPが正量部とする例は第9章にも見られる。(PP D.124a6, P.152a8, PSP LVP [1903-1913] p.192.8)
- (9) T.30 p.162c25
- (10) ABh D.73a5, P.85a6, 『青 目 註』 T.30 p.26a20, BP D.248b2, P.280b8, PP D.194a5, P.242b6, PSP LVP [1903-1913] p.385.11
- (11) これについて三谷 [2001] では、このABhの注釈が挙げられ、まず前半部分つまり有我、無我、非有我非無我のすべてを諸仏の教説とする部分がBPとパラレルであり、他方、後半部分がPPとパラレルであるとされている。そのため、前半部分に関してはPPとパラレルであるというマークがされていない。しかしながら、実際にはこの下線部①のように、前半部分についてもPPにABhからの引用が認められる。
- (12) [BP] *yang na 'di ni gzhan te (te P ; ste D) de kho na mthong ba la rgyab kyis phyogs pa/ thams cad shes pa ma yin par thams cad mkhyen par mngon pa'i nga rgyal can/ rang gi rtog ge'i rjes su 'brang 'brang D ; 'breng*

P) ba bdag med na 'di dag thams cad mi 'thad do/ / zhes skrag pa kha cig
gis bdag go zhes kyang btags (btags D ; brtags P) so/ / de bzhin du blo
gros rnam par rmongs pa/ (/ P ; n.e. D) med pa bdag (bdag P ; dag D) gis
'jig rten na phung bar (bar P ; por D) byed pa/ las dang 'gro ba lkog tu
gyur pa gzhan dag gis (gis D ; gi P) bdag med do zhes kyang bstan to/ /
sangs rgyas bcom ldan 'das sgrib pa med pa'i rnam par thar pa'i mkhyen pa
brnyes pa thams cad mkhyen pa thams cad gzigs pa rnams kyis ni/ 'gro ba
la phan gdags par bzhed pas de gnyi ga yang med do/ / zhes nges par gsal
te/ dbu ma'i lam bdag dang bdag med pa ma yin pa 'di yod pas 'di 'byung la/
'di med na 'di mi 'byung ngo/ / zhes bya ba nyid bstan to/ / (D.242b1,
P.274a4)

あるいはまた以下は別（の解釈）である。真実を見ることに背向け、一切智者ではないのに一切を知るという増上慢を有し、自らの論理に随って『我が無ければ、これら一切は理に合わない』と恐れる或る者が『我である』と仮説する。同様に、知性が覆われており、存在しない我によって世間を衰減させ、業と世間が知覚できない他の人々は『我は無い』とも説示する。無碍の解脱智を得た、一切知者にして一切見者である諸仏世尊は衆生を利益しようと望んでいるので『それらの両者とも無い』と確かに明らかにして『中道は（有）我でも、無我でもなく、これがあることによってこれが生じ、これが無ければこれは生じないのである。』と説いた。

- (13) 『青目註』の第18章は、まずすべての偈頌を列挙してから注釈を施すという形式になっている。ここでは便宜上、偈頌とそれに該当する注釈部分を併記した。
- (14) これに類似したケースとして、ABhの冒頭部分でヴァイシェーシカおよびサーンキヤについて言及されている箇所が、『青目註』では「諸論師」とされているという例がある。(ABh D.31b1, P.36b6、『青目註』 T.30 p.1c15)

〈キーワード〉 中論 青目 *Akutobhayā*